希望学・危機対応学の現在

社会科学研究所
玄田　有史

社研の全所的プロジェクト

岩手県三陸地方、なかでも釜石市と私たち社会科学研究所（以下、社研）とのつながりは、東日本大震災の約 5 年前にあたる 2006 年 1 月にさかのぼる。

2023 年に設立 77 年となる社研では、その大部分の歴史において「全所的プロジェクト研究」という活動を続けてきた。ひとくちに社会科学といっても分野は多岐にわたる。法学、政治学、経済学、社会学の研究者が一同に集まり、専門研究と同時に共同研究を行っているのは、日本では東大社研のみとなっている。その特性を活かし、社会の重要な課題の解明に向けて、研究所を挙げて一定期間じっくり取り組むのが、全所的プロジェクトである。

2005 年度に始まった、希望と社会の関係を考える「希望学」という全所的プロジェクトでは、釜石に生きる人々、関わりを持つ人々を広く対象とした総合的な地域調査を行った。

希望学は、全所的プロジェクトしては 2009 年度に終了したが、所員有志が実施するより小規模なグループ共同研究として、今も探求中である。2016 年度からは「危機対応学」という新たな全所的プロジェクト研究も開始され、震災復興は研究対象になった。

結果、現在に至るまで、17 年にわたり釜石と社研のかかわりは続いてきたことになる。復興支援も、震災前からお付き合いのあったご縁から、私たちにできること、やるべきことを当事者や関係者とともに模索してきたというのが、正直なところだ。この「ともに模索」するという支援のかたちは、今も様々な危機のなかにある地域に向き合う姿勢として、変わらず意識している。

希望学と釜石

そもそもなぜ希望学の研究対象として釜石とかかわるようになったのか。

研究を始めて以来、アンケート調査や文献収集など、いくつかの予備的な考察を行ってきた。そのなかで希望を考える上での重要なキーワードは「挫折」なのではないか、という仮説が浮かび上がる。

希望というと、未来に向かうための前向きな目標やゴールというイメージで捉えられがちだ。しかし、希望を持って何かをしている人のこれまでを調べると、大きな挫折や試練を経験している場合が少なくなかった。依頼されたエッセイでは「人生という長く続く真っ暗なトンネルのなか、明るい出口にいつかたどり続くことを信じ、前に進み続けること。そのこと自体が、希望だったりする」とも書いた。希望は暗闇のなかにこそある。

一方で、挫折から立ち直れず、絶望から抜け出せないということもある。ならば、どのようにすれば、挫折を希望に変えていくことができるのか。

そんなとき、日本各地に通じた友人の話などを手がかりとして出会ったのが、釜石だった。明治の近代製鉄発祥の地の一つであり、戦後にはラグビーの日本選手権 7 連覇を果たすな

ど、釜石には地方の希望の星だった時代がある。同時に、何度も津波による被害に遭遇、太平洋戦争中には艦砲射撃によって街が壊滅、平成になると街の象徴だった最後の高炉が休止となるなど、その歴史は、挫折との闘いの繰り返しでもあった。

挫折や昏迷のなかにある現代の人々に対し、「それでも希望はあるのだ」と語るためのヒントを探るべく、釜石とのかかわりは続いている。

震災後のかかわり

挫折を希望に変えるヒント。それは復興支援を考える上でも欠かせないものだった。

「希望に棚からぼたもちはない。動いてもがいているうちにぶちあたる。それが本当の希望。」「(どんなに困難な状況にあっても) 3 人わかってくれる人がいたら、大丈夫だから。」「夢を持ったまま死んでいくのが、夢。みなさんも夢をあきらめないで。」

すべて私たちが釜石で出会った言葉である。最後の「夢」の話は、当地に生まれ、地域の再生のために生涯を捧げた老人が、震災前に釜石東中学校の生徒たちに語りかけたものだ。東中の生徒たちは危機に対し「想定にとらわれすぎない」「できることはなんでもやる」「率先して行動する (指示待ちにならない)」を日ごろから学び、実践してきた。2011 年 3 月 11 日、3 つの指針のもと、刻一刻と迫りくる大津波を背に、学校にいた中学生たちはみずから命を守り切る。

震災前、地元の人々と語るなかで「ウィークタイズ (ゆるやかな絆)」という社会学の言葉を説明したことがあった。頻繁に会う機会のある密接なつながり (ストロングタイズ) は、安心や幸福をもたらしてくれる。それに対し、ひんぱんに会うわけではなく、生活の場所も仕事も違うが、たまに会うとお互いの話を信頼して聞き合えるウィークタイズの関係からは、未来を切り開く気づきや希望が見つかることもある。この話には地域で奮闘する人々にとって心動く何かがあるということを、私たちは釜石で知った。

あるとき、久しぶりに出会った地元の会社の社長から「こんな辛いこと (震災) を経験すると、ウィークタイズの大切さを実感する」と言われたことは、今も鮮明に記憶している。

希望学から危機対応学へ

災害から立ち上がろうとする人々の話にまず耳を澄まし、記録に残すこと。それを私たちなりの復興支援と考えてきた。ショックな事態の直後には多くの関心が集まる。だがそれも長く続くと、潮が引くように注目は失われていく。つきあいのあった人々に要望をたずねると「忘れないでほしい」と、しばしば言われた。旧知の私たちにだからこそ、率直に語りたいことがあるという印象も受けたりした。支援とは、ひたすら聞くことなのだと感じた。

学者には、時代の流行や一時的な関心に流されることなく、信じるテーマや対象をずっと追いかける自由が、責任とともに与えられている。生涯をかけて一つの学問を探求し続けてきた先達の凄みを私たちは知っている。その姿勢に学ばなければならないと思った。

震災直後の経験についての語りのなかで「持ち場」という言葉がよく使われることに気づ

いた。自分が進んで選んだわけでもない過酷な環境で、かつ必要な材料もそろわない状況において、最悪の事態を避けるべく、偶然出くわした仲間たちと、なんとかやりくりしようとしてきた経験などが「これが自分の持ち場だと思って」という言葉に込められていた。

そのことは、人類学などで使われる「ブリコラージュ」という言葉を私たちに想起させる。みなさんのやってきたことには、ブリコラージュという学問的な意味があるようだと言うと、持ち場の記憶を思い起こし、安堵の表情を浮かべる人々は少なくなかった。

私たちも次第に、科学的な概念や設計からなるエンジニアリングを突き詰めた「リスク管理」の考え方と並び、断片的な記号やヒントの並べ替えなどの工夫で困難に対処するブリコラージュを含む「危機対応」という考え方の重要性を感じるようになる。それが 2016 年に新しい全所的プロジェクト研究として始まった「危機対応学」につながっていく。

このような経験を通じ、支援とは、与えるものから与えられるものへの片方向ではなく、お互いが語り合い、学び合う、双方向のものでなければならないとあらためて実感した。

続けることの意味

2020 年にコロナ禍となり、その後しばらく釜石を訪れることができなくなる。そのかわりに、それまで使うこともなかった zoom によるオンラインでのワークショップなどの交流機会も増え、関係自体は途切れることなく保たれている。それにオンラインのおかげで、たまに会う機会がより新鮮（？）なものになり、以前とは違う盛り上がりがある気もしている。そんなゆるやかな関係は、これからも無理のないかたちで続いていくのだろう。

2000 年代半ばに希望学の調査をした一つの成果として、地域の希望の再生には 3 つの条件があるという仮説に至った。「地域のローカルアイデンティティの再構築」「希望の共有」「地域内外のネットワークの形成」である。このうちローカルアイデンティティ（地域らしさ）の再構築は、2018 年度から大気海洋研究所と協働して取り組んできた「海と希望の学校 in 三陸」のキーコンセプトにもなった。

「最近、被災地（釜石）はどうなの？」という問いを受けることが今もある。復興支援と言いつつ、私たちがやってきたのは、これらの地域の希望再生の条件が復興のなかで新たにかたちづくられていく過程を見守り、その様子を自分たちの言葉で伝えてきたにすぎない。希望の共有やネットワークの形成という点で、私たちはいつしか当事者の一部にもなった。そのささやかなふるまいが、復興に努力する人たちにとって、多少なりとも励みになったとすれば、これ以上のよろこびはない。

東京大学としての復興支援は終了したが、2006 年に初めて訪れて以来、私たちはずっと釜石とかかわり続けることを約束している。その約束を今後も楽しみながら果たしていく。加えてかつての被災地などで、友人である本学の研究者のみなさんに出会うことも、訪れる楽しみの一つとなっている。

最後に、地域のみなさん、本学関係者など、かかわってくださったすべての方々にこれまでの感謝と「これからもよろしくどうぞ。またお目にかかります。」をお伝えしたい。